

教区だより

2016

4月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

第330号



2 3

特集

「平 雅行氏インタビュー」

「人間 平 雅行 氏に迫る!」ということで、『教区だより』公開講演会終了後に平先生にインタビューしました。

4

ざっぼう
雑宝



～私を歩ませた言葉～

【筆者】 因伯組 萬福寺 衆徒
ふじの 藤野 あきお 顕生 氏

NEW 5

連載

大乘仏教一釈尊観の深化^{しんか}

《第1回》 釈尊の遺言 (1)

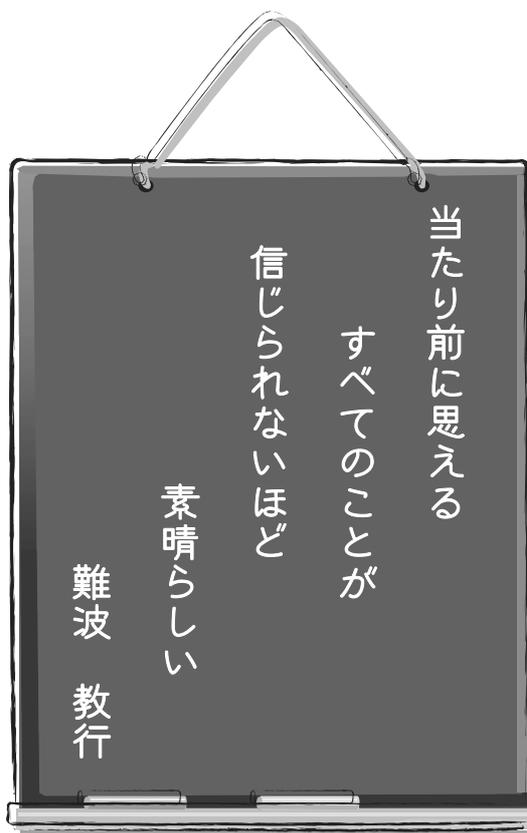
おだ あきひろ
織田 顕祐 氏

6

京都教区の動き

7

京都教区教化レポート (教区教誨師会)



——特集「平 雅行氏インタビュー」——

人間 平 雅行氏に迫る！

講演会の中で、親鸞を卒業論文のテーマにされたとおっしゃっていましたが、親鸞に興味をもたれたきっかけをお聞かせ下さい。

二つあって、一つは、私は元々文学青年肌で、小学生の頃から歴史の研究者になりたかったのです。親友がものすごい文学青年で、それを見て文学は無理だと。歴史の中で文学的な感じをする人がいないかと思った時に興味をもったのが、親鸞でした。以前から親鸞を知っていましたが、最初に行者宿報偈ぎやくしゆくほうげを読んだ時は感動しました。にも関わらず、妻帯の許可としてしか理解していない人が多くて、これはまずいと思ひ、行者宿報偈についてレポートを書きました。それが、いまの行者宿報偈観のほとんど全てです。まず感動し、この感動は何なのかと考えていく。そうすると親鸞の思想と通じるものがあるのではないかと思います。

二つめは、学生運動です。当時はとても盛んで、それに翻弄ほんろうされる時代でした。私が大学に入る前年は、東大の受験がなかった年。政治の世界が渦巻いていて、皆それで人生を狂わせて

いく。自分の意に沿わない社会・時代をどのよう生きていったらいいのかと悩んでいました。親鸞は、弾圧される中で意に沿わない社会を生きていかれた。やりたいことをやればいいのか、やりたいことをやるべきじゃないのか。どこまでが許されて、どこまでが許されないのか、何もかもがわからない。その境界を、自分で折れ合いを見つけながらしか歩むことができない。そんな時に親鸞を考えました。

そして、卒論で親鸞を扱った時のテーマは「親鸞の挫折さつせつ」。最晩年の「自然法爾じねんほうに」、それを私は、挫折、親鸞思想の崩壊、と思ひました。親鸞のように論理的に先鋭せんえいな格好で生きていく人でさえ、時代が見えなくなつて壊れていくのだと。誠実であろうとすればするほど壊れるしかない時代があるのだ、と思ひました。壊れていくからこそ好きなのだ。壊れていく親鸞に感動し、そこに誠実さをみるという感じで卒論を書きました。師匠である大山喬平おほやまけいへいは、それを読んで、「君の親鸞は泣いているみたいだ」と言つて下さり、私は死んでもいいと思ひまし

た。最高の読者を一人持つことができ、嬉しかったですね。

それから大学院へ進み、師匠の専門分野である「莊園しやうえん」の資料を、経済史ではなく思想史として読んだらどうなるだろうかと気づいた時に、研究を続けていけると思ひました。そして、どっぷりつかつていた親鸞から一旦離れ、旧仏教や鎌倉幕府の政策研究を通し、そこから親鸞を見ました。それが皆さんにお伝えしている親鸞です。遠くまで行つて、学問的な形でもつて親鸞を究明きゆうめいしたいという、その原動力は、私小説的な親鸞との出あいです。

その親鸞を一言で表現すると、どんな言葉になるでしょうか。

柔らかな感受性。柔らかな感受性をもつた人が生きていくのは、しんどいだろうと思ひます。それを感じたのは、寛喜かんぎの内省ないせいの時に、浄土じやうと三部経さんぶきやうを誦じゆしようとしたり、やめようとして、教えの面ではダメだとわかつていても、新しい現実が出てくると葛藤かつとうがある。現実が出てくるたびに、信心が揺らぎ、魂が揺さぶられて生きておられるのを感じます。信念の人という、固まっているという印象ですが、そうではなく「揺れ」みたいなものがある、柔らかく揺れているところが一番の魅力だと思ひます。

少し戻りますが、自然法爾じねんぽうにというのと、私たちは、信仰が深まったとか、行き着いた先だというふう
うに聞いてきました。あるがままということと、
壊れるということのつながりを、もう少しお聞
かせ下さい。

あるがまま、そのままというのは、信心の意
味がなくなっていくことだと。二種深信にしゅじんしんが原点
ですが、自然法爾の世界だと信心の意味がない。
絶対他力とか任せるとい世界では、自分が悪
人だとかそういうことは必要ありません。その
世界を、発展という見方があることも承知して
いますし、挫折という見方も非常に根強くあり
ます。それを私は、信心が崩壊していくとい
ふうに思います。一番親鸞を悩ませたのは、な
ぜこの世界には、念仏を信じる人間と信じない
人間がいるのかということ。阿弥陀仏より信心
を賜たまるのであるとするなら、信心が開花する
人間としない人間がいるのはなぜかと。そして
最後に、信心が不要な世界に入ってしまったので
はないかと感じるのです。親鸞の自然法爾の世
界というのは、どちらかというと、当時の旧仏
教界における本覚思想ほんかくしきょうの世界とある種通じる
のではないかと感じています。本覚思想の世界
と自然法爾の世界は近接していて、その点でい
えば、旧仏教の教えそのものに、最終的には舞
い戻って行ったのではないかと、私は考えてい
ます。

現代は、価値観やいろんなものが壊れていつて
います。自分の意に沿わない社会をどう生きる
かを課題に、親鸞の言葉から教えられたことを
今の若者に伝えるとしたら、どんなふうに表示
されるでしょうか。

一九七〇年代、私が若い頃は、日本の九割が
中産階級と想っていて、まだ貧しくて公害やい
ろんな問題はあつたけれども、食べていくこと
に不安がある時代ではありませんでした。今の
若者を取り巻く環境は、私たちの頃よりはるか
に厳しい。私の父親の世代は、働いたら働いた
だけ返ってくる。今は、働いても報われない社
会。特に若者を取り巻く環境は劣化れっかしていて、
戦後の日本が経験したことがない厳しい時代を
生きていくことになるのだと、痛切つうせつに思います。
しかし、私が若い時、大人の言葉で救われたの
では決してありません。若い頃ずっと思ってい
たことは、自分の言葉を手に入れたいと。二十
代の頃、自分は戦中派の人のような考えをして
いると思っていました。戦中派の人というのは、
戦争で死んでいく友人がいる中で、自分のして
いる学問が、彼らの死に匹敵ひつてきするだけの学問
でないと思し訳ない、という考えなのです。そ
れと同じように、自分の友人たちが政治に入っ
たりして人生を狂わせているのを見て、自分の
関わるものがいかがげんなものだと、彼らに対
して申し訳ないと。それなりのことを言ってい

るな、と彼らに言われるような自分の言葉を作
り出したい、と随分思ずいぶんってきました。今の若
者も、最終的には自分の言葉を見つけるしかな
いのだろうと思います。当事者でしか手に入れ
られないものがあると思うので、それを各々が
手に入れてほしいと願います。



雑宝



因伯組 萬福寺 衆徒

藤野 顕生

「礼拝らいはいという〃かたち〃」

数年前、ご門徒さんから「古い墓の隣に新しい墓を建てた。納めてある骨を移すので拝んで欲しい」とご依頼があり、お参りに行きました。お墓に着くと、おじいさんと小学二〜三年生くらいのお孫さんが待っておられました。墓前でお勤めの後、お墓を開けてみたところ、骨壺こつぽぼではなく土葬されたご遺骨が出てきました。頭蓋骨と手足の骨が数本。一度掘り起こされたのか、ご遺骨はビニール袋に丁寧に包まれており、随分色あせてはいましたがしっかり原形が保たれていました。

突然、人骨が目の前に現われたので、そばにいたお孫さんは「わっ！がいこつだ！」とびっくりに。隣の墓石の影に隠れてしまいました。そのお骨はおじいさんの祖父のご遺骨とのことで

したので、私は隠れているお孫さんに「こつちに来てみない？おじいさんのそのまたおじいさんの骨だよ、こわくないよ」と声をかけてみました。お孫さんはしばらく遠目から覗のぞいていましたが恐る恐る近づいてきて、最後には「ほんとだ。こわくないや」と、ご遺骨の前まで歩み寄ることができました。「この骨はわしのおじいさんだよ」とおじいさん。「へえ〜？おじいちゃんの、おじいちゃん？」と不思議そうな顔のお孫さん。そのあとみんなで一緒に合掌することができました。お孫さんはご本尊に手を合わせたわけではないけれど、先達のご遺骨を前にして何か大切なことを受け取られたのではないのでしょうか。お孫さんのお姿を通して私自身、尊い「礼拝」の場に出で会うことが出来ました。「私たちは「礼拝」ということを忘れてしまっている。中身も大切だが、まず「礼拝」と

いう〃かたち〃が大切なのです。』ある先生から頂いたお言葉です。「〃かたち〃だけでは駄目だ」という言葉はよく聞きますが、逆のことを言われたのでその時は少し意外でした。しかし考えてみると「礼拝」という行為は世界中のあらゆる地域や民族、文化や宗教を超えて、長い歴史の中で無数の人々に尊たっとばれてきました。受け止め方に色々と違いはあるのですが、自己の外なるものを尊ぶ〃かたち〃を「礼拝」と呼ぶのであれば、逆に言えば「私が、私の・・・」と懸命けんめいに自己にしがみついで生きていかざるを得なかった無数の人々の深い悲しみや苦悩、また後世に託そうとされた願いのようなものが「礼拝」という〃かたち〃となって伝えられてきたのではないのでしょうか。

日頃、自分ばかりを拝んでいる私がいま。周りの人を拝んだり尊ぶことができません。頭の下がることのない私が、名も無き先達（諸仏）の願いとその先にある教えに出遇い続けるために、これからも「礼拝」という〃かたち〃を大切にしていきたいと思えます。



親鸞聖人は、「浄土真宗は大乘のなかの至極なり」(真宗聖典六〇一頁)と頷かれまして。しかし考えてみれば、仏教はお釈迦さまから始まったと考えられています。いったい、「お釈迦さまの生涯と教え」と大乘仏教はどのようなつながりがあるのでしょうか。この点についてこれから一年間、「釈尊観の深化」という視点から考えてみようと思います。「釈尊観」と言っても分かりにくいかもしれませんが、人間観、価値観、世界観、歴史観……

といったように、複雑で重要な問題は、それをどの角度から考えるのかという点がまず大切です。お金が第一という価値観の人と、このころの安寧が第一の価値観の人とが、同じ土俵で議論することはできないでしょう。このような視点のことを「〇〇観」と称します。こうした問題が仏弟子たちの間に起ったのです。それはどのような理由によるのでしょうか。

ブツダ釈尊が在世の時には、こうした問題が仏弟子の間にかかることはありませんでした。なぜなら、目の前にブツダがおいでになったからです。しかし、ブツダ釈尊は、多くの弟子に教えを説かれた後、クシナガラで八十才の時、「自らをともしびとせよ、法をともしびとせよ」と遺言して入滅されたのです。その様子は『ブツダ最後の旅』(岩波文庫)という経典に詳しく説かれています。残された仏弟子たちは、これからの自分たちの依りどころを明確にせねばなりません。仏弟子たちに取っては、釈尊その人が依りどころであったわけですから、それを失った弟子たちに突き付けられた大きな課題であったと言えます。

振り返ってみれば、ブツダとは「目覚めた人」という意味ですから、「真理あるは道理」に目覚めたという意味と、「人」という肉体的な意味とが重なっていると云えます。仏弟子たちは、ブツダの肉体的な面を「生身」、目覚めた真理を「法(ダルマ)」と呼びました。そして、肉体的な存在としての釈尊は入滅されたのですから真理の根拠とはならないとして、「法」が釈尊の本質であると考

え、これを「法身(親鸞聖人が使われる意味と全く同じではありません)」と呼びました。ブツダとは肉体ではなく法(ダルマ)に依って成り立つものであると了解したのです。そして、その法は釈尊に依って仏弟子に語られたのですから、釈尊が説かれた教えの言葉が「法」に相違ないと考えました。それを間違わなく継承することが自分たちの課題であると考えたのです。このようにして成立した経典を「阿含経」と言います。

以前これを、「釈尊が説いた経」と呼んで講演しました。「法をともしびとせよ」と遺言された師に忠実な態度であると言えましよう。

京都教区の動き

お寺の子ども会サポート研修会

二月一日(月)、教区会館において、青少年研修小委員会主催で第一回「お寺の子ども会サポート研修会」が開催された。「なぜ、今、お寺で子ども会なのか?」と題して、酒井義一先生をお招きして研修を行った。参加者は三十四名。

講義では、「子どもたちとの出会い(出会ってしまった)」からお話しいただいた。大人が「しんどい」という表現を使うのに対し、子どもは伝える方法がまだわからない。子どもが身の上を伝えてくれる表現を先生自身が身をもって体験されたお話だった。

その後座談会に移り、参加者一人一人がそれぞれ子ども会への想いや不安に感じることを出し合った。お寺の子ども会を開催するにあたり、お互いの意思を確認できる研修になった。

(青少年研修小委員会委員 高岡 聖道)

坊守会一泊研修会

二月十五日(月)～十六日(火)、ロイヤルオークホテル(大津市)において京都教区坊守会一泊研修会を開催した。

講師に海法龍氏(東京教区三浦組長願寺)

を迎え、「王舎城の物語から阿闍世の苦しみを通して」の講題で、「救われるということ」についてご講義いただいた。

講義の中では、六師外道の問題点と、罪の深さからではなく、これ以上自分の状態が悪くなることを恐れて罪におののく阿闍世が、罪の深さを重く受け止め、教えにふれることで救われていくことが自己救済であることをご指摘いただいた。

(京都教区坊守会会長 仲野 緑)

仏教青年会公開研修会

二月十八日(木)京都教区会館大講堂において、仏教青年会主催の公開研修会「真宗大谷派歴代の事蹟と本願寺文化」一如上人から乗如上人までを中心にご講義された。

講師は山口昭彦先生(本山内事部書記・圓正寺住職)、四十名の聴衆が集まった。

昨年の江戸時代初期に続いて、今年は普段あまり語られることのない江戸時代中期の大谷派御歴代の事蹟や人間関係など、様々な資料をもとにお話いただいた。初めて聞くエピソードも多く有意義な二時間半であった。

(京都教区仏教青年会会員 横田 典)

『教区だより』公開講演会

三月七日(月)、教区会館大講堂において、出版小委員会主催の公開講演会が行われました。講師は、『教区だより』の連載に「親鸞と時代を生きる」というテーマで二年間ご執筆下さった平雅行氏。

「孫から風邪をもらい、あまり体調がよくないのですが」というお言葉から始まったものの、途切れることなく熱く語って下さるお話とその勢いに、多くの参加者が呑み込まれているようでした。

終了後には、インタビュという形で、さらにいろいろなお話をうかがいました。

詳しくは、二～三頁の特集記事をご覧ください。



(編集委員 東)

京都教区教化レポート

【教区教誨師会】

現在、京都教区教誨師会は、教区内の教誨師十二名と教区としての教誨師会がない長浜教区の教誨師一名と篤志面接委員二名の計十五名で構成されています。

当教誨師会の会員は大阪矯正管区又は広島矯正管区内にある刑務所や拘留所等七つの矯正施設にそれぞれ所属し、教誨活動を行っています。

教誨活動は、矯正施設で被収容者の希望に基づいて、法話、宗教行事、勤行等の「宗教教誨」を行っています。欲に溺れ、罪を犯した人々でさえ、人間としての人格を尊重し、一人の賜った命は無上に尊く、価値有るものと思わなければならないと皆が研鑽し指導しています。

会の事業としては、年一回の総会と、総会と併せて研修会を開催しており、この研修会は講師のお話を聞く講義や、会員の教誨活動報告や発表による考究等様々な形で開催しています。

その他、例年一泊研修会として全国各地の矯正施設の訪問・見学を行っており、これまでも数多くの施設を訪れ、それぞれの施設の矯正の取り組みや抱える課題等を学習しています。

また、これらの研修会は、京都教区保護司会と連携・交流しながら行っており、今後も会の相互発展を目指し活動してまいります。
(京都教区教誨師会会長 山本 正明)

事務連絡

《住職任命》

〔届出順〕

二〇一六年二月二十八日付

近江第七組 佛願寺 瀬戸 順一

近江第九組 光行寺 関 得道

〔敬称略〕

《敬弔》

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

〔届出順〕

近江第二十六組

鉤玄寺前坊守 釋家 美子

二〇一六年二月十九日 八十八歳

近江第四組 悲願寺前住職 出水 明

二〇一五年十二月二十日 九十四歳

〔敬称略〕

《二〇一六年安居開設について》

本講 講本 『顕浄土真実証文類』

講者 講師 小川 一乘 氏

(大谷大学名誉教授)

講題 『顕浄土真実証文類』 解釈

― 「証」の二重性についての試論―

次講 講本 『歎異抄』

講者 擬講 三明 智彰 氏

(九州大谷短期大学教授)

講題 歎異の精神

― 『歎異抄』 聴聞記 ―

期間 二〇一六年七月十七日(日)

～三十一日(日)

(ただし、二十四日(日)は休講日)

会場 開講式・満講式は真宗本廟

講義・攻究は大谷大学

※詳細につきましては『真宗』四、五月号に掲載されています。

※開設要項または願書については、五月上旬以降に教務所または本山教育部までお問い合わせください。

《東本願寺出版刊行物のお知らせ》

『往生』『浄土』『他力』

(ワンコインブックシリーズ)

往生

浄土

他力

著者 四衢亮
価格 一〇八円
(二冊につき)

真宗の「かなめ」となる言葉を題材としているワンコインブックシリーズの最新刊が、三冊同時に発売。

■ 京都教区教化テーマ ■

今いのちがあなたを生きている
 命に感謝 いのちの声 感謝すか いのちのねぐら

◆ 教区事業予定

4月 7日(木)	13:30 ~ 16:30	出版小委員会	会場◇教区会館 3F	会議室
4月13日(水)	14:00 ~ 17:00	財政委員会	会場◇教区会館 2F	大講堂
4月14日(木)	13:00 ~ 17:00	教区同和協議会研修会	会場◇教区会館 2F	大講堂
4月18日(月)	13:00 ~ 17:00	お寺の子ども会サポート研修会	会場◇教区会館 2F	大講堂
	17:00 ~ 19:00	青少年研修小委員会	会場◇教区会館 2F	大講堂
4月25日(月)	14:00 ~	教区同和協議会運営委員会	会場◇教区会館 3F	研修室
4月26日(火)	13:00 ~	門徒・推進員研修小委員会	会場◇教区会館 3F	会議室

◆ 地区・団体事業予定

4月 6日(水)	9:00 ~ 16:00	坊守会真宗基礎講座	会場◇教区会館 2F	大講堂
4月 7日(木)	10:00 ~ 16:00	坊守会常任委員会	会場◇教区会館 3F	研修室
4月 8日(金)	8:00 ~ 13:00	親鸞ウォーク 2016	会場◇京都市内	
	13:30 ~ 17:00	教区合唱団	会場◇教区会館 2F	大講堂
4月11日(月)	16:00 ~ 18:00	准堂衆会	会場◇教区会館 3F	研修室
4月12日(火)	18:00 ~ 21:00	仏青声明会	会場◇教区会館 2F	大講堂
4月13日(水)	18:00 ~ 20:00	声明会	会場◇教区会館 3F	研修室
4月15日(金)	15:30 ~ 18:00	大谷保育協会京都支部	会場◇教区会館 3F	会議室
4月18日(月)	14:00 ~ 17:00	靖国問題学習会	会場◇教区会館 3F	会議室
4月27日(水)	18:00 ~ 20:00	声明会	会場◇教区会館 3F	研修室

「教区だより」第330号

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

発行日 2016(平成28)年4月1日
 発行人 磯野恵昭(真宗大谷派京都教務所長)
 発行所 真宗大谷派京都教務所
 〒600-8164
 京都市下京区花屋町通烏丸西入
 Tel: 075(351)5260
 Fax: 075(351)5256
 メールアドレス: kyoto@higashihonganji.or.jp
 ホームページ: http://www.k-kyoku.net/

印刷所 (有) 寶印刷工業所

the editor's note

編集後記

二歳の息子を保育園まで送る時間が好きだ。日々成長を感じることができる。先日、通り道の民家にいる大型犬に吠えられても、彼はグッと堪えて泣かなかつた。遅くなったなあと嬉しくなった。保育園に預けることに申し訳なさを感じたこともあったので、元気に通園する姿を見るとホッとする。▼待機児童問題や保育士の待遇が議論されている中で「母親が家庭で育てるべきだ」という主張を目にするとガクッとする。子育ての多様性が尊重される社会の方が住みやすいと思いませんか? (編集委員 本多 真)